横浜現代史人物伝①
鶴見の医師・渡辺歌郎

一、「渡辺歌郎」資料の寄贈

二〇一〇（平成二二）年一二月、横浜市史資料室は「渡辺歌郎」に関する歴史資料の寄贈を受けた。寄贈者は川崎市川崎区において耳鼻咽喉科医院を営む手島（旧姓：渡辺）温子氏、手島氏は歌郎の孫にあたる。江戸時代から六代続く医家の継承者である。

さて、「渡辺歌郎」とはどのような人物なのか。歌郎は鶴見区鶴見仲町（現・鶴見中央四丁目、京急鶴見駅付近）で個人医院を経営する医師で、神奈川県学校医師会長や町会議員を務めるなど鶴見地域の有力者であった。

一九三〇（昭和五）年に刊行された『鶴見興隆誌』は歌郎について、「渡辺氏は鶴見医師中の重鎮と言ふ許りでなく、寧ろ鶴見在住民中に於ける有数の人材として其の盛名と信望隆々として輝き、資財も勢力と共に進展しつゝありて、今や其の富は移住者中の首位を占むと謂はる」と評している。また、鶴見選出の県会議員である佐久間権蔵との繋がりも深く、その日記にも歌郎の名前が度々登場する（横浜開港資料館編集・発行『日記史料叢書〔I〕　佐久間権蔵日記』第一～五集、一九九九～二〇〇三年、参照）。それらの資料から鶴見の地域社会において重きをなしていたことが窺える。

渡辺歌郎　1930年撮影　　手島温子家資料

これまで渡辺歌郎については、今井清一氏が著書『横浜の関東大震災』（有隣堂、二〇〇七年）で『感要漫録』所収の「歌郎之一代」を紹介し、震災時の鶴見の分析を行っている。『感要漫録』は歌郎の記した随筆で、震災時の回想を含め、自らの半生や病院の経営状態、地域・家族の日常などを記録している。手島氏の話に依れば、歌郎は非常に筆まめな性格で、時間さえあれば記録を認めていたという。

ただ、今井氏も著書で指摘するように、『感要漫録』のすべてが残っているわけではない。今回、寄贈された資料群には、『感要漫録』第六～七巻の原本と、「歌郎之一代」の抜粋が含まれているが、残念ながら他の部分は戦災等によって散逸してしまったようである。しかし、現存する部分も過去の横浜を語る貴重な歴史資料であることに間違いない。現在、当資料室では公開にむけて目録等の準備を進めている。

今回はそれに先立ち、鶴見の医師・渡辺歌郎の生涯を寄贈資料の内容とともに紹介する。

『感要漫録』と「歌郎之一代」　　手島温子家資料

二、『感要漫録』

「歌郎之一代」は『感要漫録』の余白部分を利用して書かれた渡辺歌郎の自叙伝である。冒頭において歌郎は、「余の一生は果たして幸福なりや否やを顧みれば過ぎにし七十年余の長い年月経て来たまゝを参考迚に茲に書くことゝした」と、執筆に至る経緯を記し、続けて「余は明治元年四月十一日茨城県石岡町に生れ今年数へて七十七歳の喜の寿祝ひ其間幾多の苦難と不幸とに遭ったがどうやら夫れを突破し今は先づ安楽の生活に立ち七十七歳の長寿を保ち緩々と余生を送り得るは余が一生は先つ幸福の方ならんか併し若年の祈りには幾多の悲哀や又恐ろしい事にも遭って悲観其極に達せし事も又屡々あり夫れを想へば唯単に幸福の一生とのみ想はれざる者あり」と、自らの半生を振りかえる。七七歳という歌郎の年齢から考えて、戦時中の一九四五（昭和二〇）年前後に記されたのだろう。

歌郎は自らの半生を三部に分けて自叙伝に記している。その第一部は医師を志し、県立茨城医学校から県立愛知医学校を経て内務省医術後期試験に合

鶴見・渡辺医院　1929年撮影　　手島温子家資料

格するまでを、次いで第二部は妻みを子との結婚から鶴見に落ち着くまでを、そして最後の第三部は鶴見大火などの苦難を乗り越え、関東大震災に遭遇するまでを記している。自叙伝自体は震災の記述で途切れており、その後の状況は明らかでない。

なお、原本の残る『感要漫録』第六巻と第七巻は、前者が戦時中の記録、後者が敗戦時の記録で、戦時下の鶴見や疎開先の中郡高部屋村（現・伊勢原市）の状況が垣間見える。それらの記録と「歌郎之一代」の記述には、多少の相違点が見られるが、今回は主に後者を中心に歌郎の生涯を追いかけたい。

渡辺歌郎・みを子夫妻（中央）と渡辺医院の職員　手島温子家資料

三、渡辺歌郎の生涯

渡辺歌郎は一八六八（明治元）年四月一一日に茨城県石岡に生まれた。歌郎の父・玄英は産科医師で、その家業を継ぐため、歌郎も一七歳の時に医師を志した。そして一八八五（明治一八）年三月に茨城医学校に入学するが、その翌年に母・センを失い、また、一八八八（明治二一）年四月に茨城医学校が廃校となるなど、度重なる不幸に見舞われる。しかし、歌郎は負けることなく、上京して内務省医術前期試験に合格、さらに茨城時代の恩師の誘いで愛知県医学校に入学した。その後、在学中の一八九三（明治二六）年一一月に京都で行われた内務省医術後期試験に合格し、医師の道を歩み始める。

東京に戻った歌郎は鶴見を訪ね、医師の岩村友軒に卒業を報告する。岩村家は鶴見で三代続く医家で、友軒の次女みを子は歌郎の許婚であった。そのみを子もまた医療従事者で、助産婦の資格を有していた。友軒は歌郎の報告を大いに悦び、直ちに佐久間権蔵の媒酌のもと、結婚式を挙げた。歌郎と権蔵の縁はこの頃からであろう。また、歌郎は一八九四（明治二七）年四月に鶴見に医院を開業する傍ら、東京湯島の順天堂病院（内科・産婦人科）に勤務し、その腕を磨く。

校医勤務（鶴見高等女学校における家庭看護法講習会）
1934年撮影　手島温子家資料

歌郎夫婦の医院は鶴見地域の発展と共に大いに繁盛したが、一九〇〇（明治三三）年春に岩村家長男が医学校に入学したのを契機に、歌郎は家族を連れて石岡に移る。そこで改めて開業し、新たな地盤を築くが、岩村家長男が医師を断念したため、歌郎夫婦は友軒に呼び戻された。友軒は代々続く医家の断絶を危惧し、歌郎に岩村医院の相続を打診、歌郎は玄英とも相談した結果、養子に入らずに岩村医院を継ぐことになった。そして岩村医院は「渡辺医院」と名称を変えて存続する。

その後、渡辺医院は一九一一（明治四四）年三月三一日の鶴見大火で焼失したが、歌郎夫婦の努力で再建し、鶴見地域の医療を担っていく。歌郎は鶴見地域の会社医や学校医、さらに町医や警察医に嘱託されるなど、地域医療の中心人物となった他、みを子も助産婦として多くの出産に立ち会った。

一九二一（大正一〇）年、歌郎は鶴見の町会議員に当選し、二年後の関東大震災ではその対応にあたった。また、神奈川県学校医師会長として学校医を先導しつつ、児童の健康増進を図った。

一方、先代と同様に歌郎も後継者問題に頭を痛めたようである。渡辺医院の経営は順調だったが、跡取りの男子を肺結核で失ったため、婿養子を迎えることになった。しかし、その婿も病理学の道に進んだため、歌郎は孫の手島氏に期待を寄せたという。

日米戦が激化した一九四四（昭和一九）年一一月、老年の歌郎は婿に病院を任せ、自らは中郡高部屋村に疎開する。翌年の五月二九日、渡辺医院は横浜大空襲で焼失、歌郎は疎開先でその報を受け取った。敗戦後、歌郎は疎開先での開院を模索していたが、実現しないまま、一九四六（昭和二一）年に七八年の生涯を閉じた。

【参考文献】、手島温子「医者の跡継ぎ」（『日本耳鼻咽喉科学会　神奈川県地方部会報』第二四巻第二号、二〇一〇年一一月）

（吉田律人）